

13章

プレイバックシアター あれこれ

鵜山 洋子

(帝塚山大学非常勤講師、奈良県スクールカウンセラー、NPO法人「夢咲く大地」代表)

はじめに

この原稿を書くにあたって、改めて私自身を振り返ってみるに、「対人援助にアートを使う」というよりもまず、自身がおとぎばなしを演じた折、自分の家族の病理のようなものに出会い、それ以降から脚本づくり、演出、役者などドラマづくりに熱中したことを思い起こす。

それから後、家族描画をとおして、潜んでいた我が身の問題に気づき、これを見つめ続ける仕事をしていたらそれが「アートを使う対人援助といわれるものだった」というのが真実のような気がしている。

家族描画を療法だと確信したきっかけは、数十年前のことだが、癌を患っていた母が逝去した直後のことだったと思う。

家族の絵をクレパスで描き、その中で使った一色の色を選び、その一色を使ってもとの絵を上から塗りつぶしたときに浮かび上がったそれぞれの家族の顔に驚愕した体験である。

特に亡くしたばかりの母は「異国の人」にみえた。

色彩の魔法なのであろう。最初に描いた絵が自分が自覚して描いた家族の像とは全く異なるものであり、その時のじぶんにとっては塗りつぶして浮かび上がった家族像のほうがしっくりきたのである。本当に魔法だった。目の光、髪の色、輪郭が全く違って見えたのである。

表現の光と影を体験した瞬間であった。

「光と影」「裏と表」「背景と今」といったようなものをアートは見せてくれる。語りを考えても「何が語られるのか」「何が語られないのか」「何から何に繋がったのか」ということをみると、語り手の人格の厚みや感触に触れることができる気がする。人生の真実ではなく、リアルさでもいおうか。

「語り」を「騙り」と表現してみると、「伝説」や「言い伝え」などは妙に現実感を含んでいると思ひ当たる。筆者は「語り」の光と影だとも思う。光が騙りか影が騙りかということは置いておいて、日本文化のなかにも例えば、文楽の美しいお姫様人形が瞬間に鬼の顔に化す見せ場があるのもご存知のことであろう。

プレイバックシアター

舞台にあこがれ、自己表現を探求し、ゲシュタルトセラピーやナラティブセラピーを学びはじめていた筆者が遭遇したのが「プレイバックシアター」だった。1980年代の始め、創始者のジョナサン・フォックス氏が初来日した折に、ある縁で出会ったのが最初だった。それからずいぶんと長い年月が流れ、日本のプレイバック人口は世界のトップになろうとする勢いで増え続けている。

プレイバックシアター（以下PT）とは、語り部のストーリーをその場で再現してみせるというものなのだが、「よい」PTを演ずるために不可欠な要素が「社会性」「リチュアル」「芸術性」である。それと、グループに必要な5つの要素というものを実践化しているのが、世界でのPTのリーダーたちのコンセンサスである。

五つの要素とは

Inclusion

Story

リチュアル

自発性

傾聴

であるとジョナサン氏はいう。

Inclusion ひとりにしない。

グループ全体をみるファシリテーターとして存在する時に必要なことだが、いつ、どのようにスポットを当てていいもの

かいつもとまどい、葛藤する。

Story

これはPT独特の使い方があるような気がする。まさに「物語」「お話」と解釈しておいていただく。アクターが、語られた話を即興で演じるために、「語り」の底に流れる「エッセンス オブ ストーリー」を研究し、解明するトレーニングは不可欠である。理解力 直観力 洞察力を特に鍛えねばならないと考える。

リチュアル

私はこの言葉を「枠」「リズム」「儀式」「儀式のように必ず守るべきもの」「法則」という意味づけで使用することが多い。箱庭や描画法を導入する場合と同の意味だとも考えている。

リチュアルが存在することによって「場」に、安全と変容する力がもたらされる。

社会生活の場面で「安全」と「興奮」が同時に存在することは少ないが、儀式がうまく執り行われている場では、この相反する要素が素にある。

トランスパーソナルな部分へと人を導く能力、ルールを守る力、情動的エネルギーを高揚させていく力、そして変容をゴールとして意識しながら場にいられる能力や耐性もこれに該当する。

自発性

創造性や独創性もこれに続くと思うことがあるが、もちろん同義ではない。この部分はグループの中でのリーダーシップと役割に深く関わると考える。

自己と、グループのアイデンティティの一致が難しいが、前述のリチュアルを意識におけば、あまり問題ではないと思う。

傾聴

PTの場合、語り部(ストーリーテラー)に対して行うのだが、storyを預かるコンダクターとしての傾聴、そのstoryを即興で演じるアクターの立場からの傾聴、見守る観客としての傾聴がある。

もともとテラーは観客の中から出てきてもらうのだが、観客は、初めて出会う人であっても、今、自分の傍に座っていた人が自ら皆の前に出て、語っているという事実があり、「いったい何を語るのだろう」というような好奇心をもって聴こうとするかもしれないし、「あまり聴きたくない」という姿勢でいるかもしれない。

コンダクターはテラーとのやりとりのなかで、それは観客の気持ちをテラーのstoryに集中させなければならないとともに、テラーとのラポールを築かねばならない。

そして、コンダクターは真摯に傾聴をする態度を表しつつ、観客のエネルギーに注意を向けながら、アクターが理解しやすいように、シーンをより具体的にイメージし易いように、インタビューを進める。

こうやって述べていくと、プレイバックシアターを実践するのは様々なトレーニングが必須であると説いている気になってしまう。もちろん、それは事実ではあるが、元はといえば口承文化が発展したものであり、演者は市民アクターであるのが原則である。

最近の筆者は、素朴でより洗練されたPTをゴールにしている。人が人らしく、しかも進化を確認しながら日々を過ごしていくことが最も重要ではなからうか。

しかしながら、「人」をアートで表現するとしたら「何が見えるのだろう。どう表現するのだろう」と頭でぐるぐる考えてしまう。故に、「いまここで」の自分と何かとの出会いに希望を託して、再びの場に備えるのである。

とにかくやってみるのである。失敗などないのだから。

Oneness

次にもうひとつ、「STORYの織り成す綾が生むOnenessの実感」について述べておきたいと思う。PTの公演やワークショップで演じられるstoryは、それぞれが一つの物語として語られながら、最後には大きな物語の各章をなすが如く、物語全体の一部となる。

「先に出たstoryが次からのstoryの伏線となる」

「それまでに提示されたものと異なる意見を含む」

「テラーが逆の立場、あるいは異なる視点を持っている」

「最後のストーリーが、変容を示唆する」

そして、この「紡がれる糸」は一本だけでなく複数の場合が多い。これを紐解くとき、ナラティブ分析がとても役立つ。

StoryがStoryを呼び、平等に分かち合われるとき、Onenessが生まれる。共感、親密感、一体感が感じられる。そのとき、Inclusionを達成できているのだ。筆者はこの瞬間を体感するためにPTを実践しているともいえる。

最近のPTでは、この一体感やつながり感をあえてOnenessと呼んでいるのだが、この感覚はもちろんPTだけのものではない。人間の営みに不可欠のものだと思う。そう考えれば、人間そのものがやはりアートなんだなあと感じ深い思いに駆られてしまう。

土のおだんごをつくってままごとをし、家族ごっこ遊びをした幼い日の思い出や、かくれんぼをして、ひとりでどきどきしながら、息を呑んで身を潜めて隠れているのだが、「みいつけた」と鬼につかまえられたとき、悔しいのだけれど、なぜかほっと安心した記憶を思い起こしたりすると、ふいに高まり始める情動を丁寧に受け取り、慈しみたいと思うのである。

Playful

こんなふうにならぬPTについて少しは講ずることができるようになったが、PTって何？と尋ねられたとき、まず何を伝えるのがニーズにあうのか、迷い、葛藤するところである。最近是人によってだが、「とてもあったかくて楽しいもの」だと伝えている。いわばPTの「Playful」の要素を打ち出すことに

した。

PTに参加すると、共感、親密感を得、ときに、秘密めいたいたずら気分をも共有することがある。これらはまるでその場で語られる「あの時其の場所」へ手を繋いで一緒に旅する感じなのである。

一人の積み残しもないように、コンダクターは全員に気を配り、旗を振る。リチュアルに守られた旅は安全でかつエキサイティングである。

そして何よりも楽しい。

むすび

常日頃、筆者は、PTだけでなくセラピーにもPlayfulの要素は重要で、必須なものだと考えている。そして、セラピストとグループが互いに成熟している必要があるとも考える。相互の信頼度、創造性、自発性が高い水準に達しているとき、Playful小僧はのびのびと縦横無尽に風に乗って駆け巡ることができるように思う。そしてグループは、ジョークやユーモアで笑いに包まれる。

このような状態は、セラピーの終結がちかづいているとも考えられる。必ずや迎えなければならない終結と別離は、アートが自然の懐に戻っていくことなのか、次の受け手に手渡すときなのか。

現在筆者は、教育現場に身を置いている。幼児、初等 中等 高等と段階を経るに従って教育の中から、お約束のようにPlayful小僧は姿を消していく。現代社会こそPlayfulが必要なのになぜ？と大きな疑問と怒りを抱いている。

自分にできる、もしくは自分にしか出来ないものがあるとしたら、自身がPlayfulの親玉となり、次世代のPlayful小僧さんたちを養成するのが、「対人援助」となるのかもしれないと、祈るような気持ちで奮闘する日々である。